バイリンガルと感情のダンス

バイリンガリズム＝話される言葉と文化的背景

フランスの若者は、フランス語でアニメを観たり漫画を読んだりすると、どうして日本語を習いに行きたくなるのでしょうか？ それは、**日本文化**に魅力を感じると、どうしても言語という媒介を通して知りたくなるからです。言語は、言おうとしている以上のことを語るものです。だから、バイリンガルという用語から、すぐにバイカルチャーという用語に移行するのです。

言語は自分の所属する**共同体**との関係を問わせます。

質問：あなたの場合は、バイリンガルとバイカルチャーのどちらの言葉が当てはまると思いますか？

ブログで読んだのですが、日本に住んでいるあるフランス人のお母さんが、**子どもにフランス語を話すことが、どうして難しいのか**を自身に問いかけています。彼女は新しい文化に早くなじみたいわけです。脳は日本語を浴びながら、言語習得に最大の集中力を費やします。そういうときに、母国語に戻ることは、その反対の努力をすることになるので、なかなかできないことなのです。

それに、このお母さんの頑張りは、周囲の日本人に評価されるのです。
「いえいえ、とてもお上手ですよ！」と。周囲の人は、建前で褒めているわけではないのです。外国人が日本語を覚えるのは難しいというのは、日本人のあいだでは通説です(それが間違っているというわけでもありません！！）。このお母さんにとって、こんなに褒められたら、さらにうまくなりたくなるのは当然です。

ところが、その反対は、そうはいかないのです。フランスは多文化社会です。それに反するような形で、多言語を話すことに不寛容なのです。調査によるとフランス人の四分の一は、多言語を話す環境で育っています(論文を参照）。 ところが、自分の言語でないものは、まるで、フランス社会を**脅かす**、**尋常じゃない**もので、いくつもの言語を使いわけるのは、フランス社会への同化への拒否と見なし、この現象を無視しようとする傾向があります。私たちは家庭で母国語を話さないようにお母さん方に要求した、何もわかっていない教師について話しました。

私たちは、スポーツ、芸術、軍隊、さまざまな集団、演劇、カトリックの教区などのマイナーな文化に関わっていることを考慮すると、メジャーな文化の内部では、私たちはみな、多文化人です。その両者の境目ってなんだろうって、いつも私たちは考えてしまいます。

さて、私たちのテーマの核心に触れてみましょう。

さきほど少し取り上げた子どもは、母親の愛情と社会的なコンテクストに置かれた言語の言葉によって**フィルターをかけられた**母親の表現とのあいだにズレを感じているのでしょうか？ 親子関係にあ

る種、**自然さ**が欠けていないかどうかを考えてみたいと思います。

私たちがすでに指摘したように、口から出た言葉が、態度に現れる深い所で思っていることと食い違っていると判断するとき、言語表現を補助する**非言語**メッセージを読むことで、本当は何が言いたいのかを想像することができます。表情、アイコンタクト、しぐさ、声の高さのようなパラ言語などは、子どもによって感じ取られているのです。私個人の例ですが、歌の先生は私のドイツ語とフランス語の声の高さには、相当な違いがあると言われました。

ある種の子どもたちは、母親の本当の感情を捉えて、愛情ある結びつきを得るために、これらの心身の多重層になっているコミュニケーション回路をすべて通過して行くのです。

子どもが両言語ともでき、そのバランスが取れたとき、バイリンガルになると仮定してみましょう。

質問：子どもが感情表現をできるほど大きくなったとき、どちらの言語を使うようになるのでしょうか？

Dewaele (2013) は、言語習得の順序と年齢と文脈、そして優勢な言語の四つの要因がバイカルチャーの感情に関わっていると述べています。

心理学研究の分野での一致した見方によると、感情は精神生物学的な現象であり社会システムに関与しているそうです。(Averil 1982, in Lorette 2015）

質問：第一言語あるいは母国語が感情表現に密接に関わっているのでしょうか？ あるいは、ときとして、過剰な感情表現の源泉になるのでしょうか？

第二言語で自分の感情体験を話す方が、場合によっては楽なこともあります。それは、じっさいの**経験**に**距離**を置くことができるからです。 **したがって、**人に話したくないこと、**つらいことやトラウマになっていることに対して口を開いて明かすことができるのです。**また、そうなってしまう(両親のどちらかの愛を失う恐怖）ことを心配しないですむのです。

距離「早期に二言語の環境で育ち、第二言語を覚えた場合(早期に継続的か、あるいは、遅いと言える六歳以降でのバイリンガル）」 は、その言語は第一言語と同じ重みをもつだろう」。(Dewaele in Rolland 2017）バイリンガルは**第二言語で、好きになったり、いらいらしたり、冗談を言ったり、ナンパしたりする**のでしょうか？ 異なった状況に置かれたとき、この種の体験が、彼らをして感情表現のためにどの言語を選ぶのかを決定し、いずれかの要因が彼らの選択に左右するのです。(Pavlenko 2017）

質問：言語能力が、感情表現をするための言語選択を決定するのでしょうか？

回答：両言語が同等の水準で使えるのは、稀なケースであることを考慮すると、言語能力の足りなさは、ある種の文脈ではその言語使用の妨げにはなりません。反対に、高度な言語使用能力があれば、感情表現のためにその言語を駆使できるというわけでもありません。(論文参照：エリザ・バルビエ、「バイリンガルにおける感情表現の言語選択」、アンジェ大学）

質問：言語活用能力に劣る方の言語では、肯定的感情の方が否定的な感情より表現しやすいですか？ たとえば、「好き」と言うとしたら、自国語と、それとも、それよりも使いこなせない言語では、どちらで言えそうですか？ 「アイラヴユー」は、その好例です。

質問：使用言語によって、パーソナリティが違ってくると思いますか？

何を伝えようとしているかによって、声の出し方と大きさを調節するので、**自分自身を投影するイメージ**(エートス）は変わってきます。日本語では、声が非常に小さいのが特徴です。(シャルル・ブラサール，言語学博士で専門はバイリンガル、ナント大学）
回答：声を抑制して話すのは、謙遜したり、でしゃばらないことを表そうとするときです。見せようとする**パーソナリティ**に合わせて、 言語はこういった側面を出させることを可能にします。たとえば、フランスでは声を荒げることが社会的に許容されているので、フランス語では、いらついて声を荒げることがよくあるわけです。
反対に、日本社会（論文参照）では，怒って答えることは「distance-creating-act」、つまり、物理的にも心理的（冷たさ、不機嫌）にも相手を遠ざけようとし、怒りを引き起こした人と関係を絶とうとする行為です。これは、**言語的な表現でなくむしろ行動**といってよいものです。(参照：テキストは英語）

回答：私たちの言語選択は、アイデンティティの選択です。

この日英のバイリンガル研究でわかるのは、それぞれの感情表現が、それぞれの文化の社会文化的な期待に影響されていることです。これらの規範は、感情表現に影響を及ぼすとともに、自身の周囲の他者の感情を認識し理解することを可能にします。

バイリンガルでは、情緒的なものを感じたり、感情表現をするためにふさわしいと思う言語は、社会文化的な要因、また、個人的な経験と結びついています。(ウォン 2016）第一言語は第二言語より感情表現が豊かかと問う代わりに、すべての面でそうであるのだろうかと問うてみてはどうでしょうか？ バイリンガルは、第二言語でショックの大きな感情体験をしており、第一言語は両親と強い関係をもっていると考えた場合、子ども時代に両親から受けた非難や叱責といった刺激をどう感じているのでしょうか？

同様にこうも問えます。感情において豊かな言語は**バイリンガルの人生を通して**存続するのではないだろうか、あるいは、言語使用の環境によって変化する可能性もあるのではないだろうか、と。(日米の研究を参照）

バイリンガルは**意識的に感情的な距離をとるためや、自分自身にとって、そして、相手の眼から見て**自分の評価を高めるために、どちらかの言語を選ぶことができます。

状況によって決定されているときでさえ、言語選択は**意識的な**判断です。それに対して、感情という

ものは、必ずしも**個人にとって完全に意識的である**何かではありません。

結論

感情がどちらかの言語にダンスのように揺れ動くこと、それは、幸運な贈り物（柔軟性、潜在性）でしょうか、それとも葛藤の場そのものでしょうか？

言語選択に関してですが、表現とアイデンティティだけを上げ、防衛や保護については取り上げませんでした。

家族言語である第一言語は、禁止用の言語を構成することもでき、そこに超自我を見いだすことができます。セラピーにおいて、第二言語の選択は、克服すべき不安を回避する(**保護**）ための**防衛**機制を担うことができるし、また、「超自我の支配を弱める手段」でもあります。(Buxbaum 1949）

きちんとは説明できないのですが、英語で言う「スプリッティング(splitting）」という現象とフランス語の「sidération」とを関係あることとして、私は結びつけたいと思っているのです。おそらく説明できる人がいるんじゃないですか？　忘れたり抑圧された記憶が**二つの言語のあいだに挟まれて**いることがあります。**(AMIEL 2017）** 抱いた感情が心に届くすべを知らないことがあるのです。「あいだ」のような、ひとつの言語にも、もうひとつの言語にもその表現を見いだすことができない宙づりの状態というものがあるのです。そこでは、どちらかの言語を選ぶということさえできません。

参考文献

論文：エリザ・バルビエ「バイリンガルにおける感情表現の言語選択」、アンジェ大学
講演：シャルル・ブラサールはナント大学講師。言語学博士であり専門はバイリンガル。
日米研究：マイケル・ウォン「バイリンガルの視点から見た日本語と英語における感情の概念と表現」
書籍：バルバラ・アブデリラー＝バウアー『バイリンガルの子どもの挑戦』、Edition la Découverte